

落ち葉流れる
佐川憲一郎さん

水の思い出 ③〇

風景写真と水

自然景観を撮る風景写真では、海や川、湖沼を被写体にする 경우가多くあります。作品を見ると、自然の風景を撮っていないながら、その多くは水を撮っていることに気づきます。水の変化した霧や雲、それに雪や氷は風景写真の絶好の被写体となっています。

奥日光の小田代ヶ原には、幾度となく撮影に出かけました。湿原を漂う朝霧に朝日が差し込み、黄金色に輝く時などは、またとないシャッターチャンスです。

湖沼の多い裏磐梯は霧が多く出る場所でもあります。紅葉と霧の組み合わせは、カメラマン垂涎の被写体となります。この地は、冬には大量の降雪があり、雪原にレンズを向け数多くのシャッターを切ることになるのです。

秋の訪れが早い尾瀬ヶ原は、夜明けは霧に覆われます。陽が高くなるにつれて霧も消え、点在する池塘の水面が上空の秋空の色を映して群青色となります。紅葉したヒツジ草が一段と鮮やかになります。

上記掲載の写真は、自宅近くの山田川の支流の小さな溪流で撮影したものです。市内のほとんどの小学校では、「月の歌」として月ごとに全児童が季節にあった歌を歌います。10～11月に歌われる曲として「もみじ」があります。この文部省唱歌のなかに『溪の流^{たに}れに散^ちり浮^もく紅葉…水の上にも織^おる錦』の歌詞がありますが、水面に浮く黄葉を見て、この曲が脳裏を流れました。

ファインダーをのぞきながら、よりよい構図を探していました。しばらくすると流れ去る落葉があることに気づきました。スローシャッターを切れば、葉がブレて動感が出るであろう事が予測できたので、しばし落葉が流れてくるのを待ちました。風景写真では、その場ですぐにシャッターチャンスに恵まれることはほとんどありません。数時間待つことはもちろんのこと、被写体によっては、数ヶ月、場合によっては数年通い続けてやっと撮れるものもあるのです。

下高倉町 佐川憲一郎

記憶の扉をひらく～私を語る本のすすめ

自分の生きた記録・記念・証として自分史を創る…。時に淡く消え去ってしまう記憶をひとつの「もの」として残すことの意義は決して小さなものではありません。写真・文章・作品集、さまざまな形をとりながら伝えられていく「私のものがたり」の魅力をご紹介します。
(菊池幾子・鈴木久美子・塩原慶子)



常陸太田をつたえる



川崎勝平さん



「常陸太田を撮る -
川崎勝平写真集1950～2000」



昔の常陸太田駅前



「思い出
小学校卒業まで」

「散見する多くの写真は『写る』ものが多い。写真とは「たまたま写った」ものではなく、深い意図を持ちつつ『写す』ものでなくては」と語る川崎さん。「見なれた風景を、単なる風景写真としてではなく、市民の生活や民俗的・歴史的背景が浮き立つように」写された写真にさらに効果的なキャプションが添えられます。映像はものがたりを伴ってこそ生きるものだからでしょう。

「小さな頃を懐かしく思い、思い出を綴っておきたい」とまとめられた本は、常陸太田の四季折々の風俗習慣を知る貴重な記録であり、懐かしくまた楽しく読めます。その頃の子供たちのわらべ歌やまちの賑わい・雑踏の音までが、行間から立ち上がり聞えてくるような気がします。



岩間 實さん

平成13年度開催の自分史講座・講師の斉藤平(さいとうひろし)さんに自分史とは何か、どう創るかをうかがいました。

「私の経験なんて、書く価値がない…」などという方が時々います。たとえ小さな経験でも他者にとって大きな参考になることがあり、自分史を書く資格はすべての人にあると言ってもいいでしょう。特に激動の時代を生きてきた方たちの経験は正史では拾いきれない貴重な資料になりえます。また、若い人たちにとっても、心に抱く「想念」を言葉に置き換えることは、客観的に自己を見つめることになりこれからの人生にきっと役立つはずです。自分史を創る意欲のある方は多いものの、完成までの段階で悩まれることもあり、アドバイスできる第三者がいるともっと多くの方が取り組めるようになるのではないのでしょうか。



斉藤 平さん
元茨城新聞社副社長(東海村)

自分史に取り組むポイント

- その時々を思いを
書き留めておく
- 「私」中心に書く
- 「なぜ」を意識して書く
- 完成形を具体的に考える
- 公開の原則を念頭に置く
- バランス感覚を忘れずに

いい出会いは人を育てる。本は、著者の貴重な体験や視点を、距離や時間を越え、いながらにして自分のものとしてとすることができずばらし出会いの宝庫。ここでご紹介している本はすべて「市立図書館＝出会いの宝庫」で手にすることができます。そしてあなたの「ものがたり」もいつの日か宝物として図書館へ、そんな夢をいかがでしょう。

経験をたくす

40代で奥様に先立たれ、忙しさを増す仕事と子育ての負担でつぶれそうな気持ちになった時、「今日一日のことだけをきちんとやればいい、と思えた瞬間から楽になった」、そう当時を思い出して語る飯嶋さんは穏やかな笑顔の方でした。教師時代に生徒たちがよりよく理解できるようにと授業の準備に作られた資料は7000枚あまり。積み上げると子供の背丈ほどになるそうです。その資料を基に、古希に向けての身辺整理にと本をまとめられました。



飯嶋 武さん



「可能性を求めて」

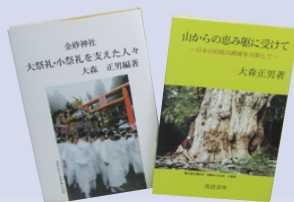


大森正男さん



「先生と生徒の
交流記」

「いつかは本を出そうと、教師時代からずっと生徒たちの様子を見つめ記録を残してきました」。大森さんは生涯で10冊の本を出そうと考え、今4冊目に取り組んでいます。11月に出版される予定の本は、ここでご紹介する本の続編にあたるもの。今度は、もしかしたら今これを読んでいるあなたが登場するかも知れません。「山登りが大好き、目標の山頂までまだ4合目、これから出す本がとても楽しみです」お話をうかがって元気をいただきました。



人をつなぐ

子供の頃から本が「人生の師」だったのだそうですが、今のように自由に読書できる環境ではなく読書から遠ざかった時期もあったそうです。が、「自分のしたいことをせず、周りに気を使ってばかりいると自分を失ってしまう」と思いを言葉にすることを続けてきました。「何かを感じた時は、すぐにその思いを書き留めておきます。『今』でないとその感動や心の動きが消えてしまうから。」そのようにして綴り続けてきた文章をこの夏、形にした飯田さん。「自分史により、自分を再発見した思いです」。



飯田愛子さん



「農婦の徒然記 大地の詩」

ことばをつむぐ



國安 暁さん



「黙示への旅」

「話がおもうがままにいかない。高校生のころ、自分を表現するモノを詩にしたのがきっかけ。詩であれば、不満・不条理を言葉によってぶつけることができた。詞（ことば）が織りなす空想・理想の無限世界。それは大学ノートに数十冊にも及びました」。國安さんの詩集にある一つ一つの詩からは、人間の本质を垣間見、そして人というものについて考えさせられます。みなさんはどのような感想を抱かれるでしょうか。

心を耕す 朝の読書

太田第二高等学校里美校（旧里美高校）では、平成10年から、全校あげて朝の読書活動に取り組んでいます。子供たちに限らず大人の活字離れを嘆く声が聞かれます。活動を推進してこられた神永利一先生にお話を伺ってきました。



■驚くほどの静けさ



「学校があられて問題になった時期がありました。その後落ち着きましたが、生徒たちの心をもっと豊かにと考えていた

ころ、朝の読書の実践をしている学校の話を知り、これだと思いました」授業を5分短縮し、10分間の読書の時間を作り出したのだそうです。

「驚くほど静かです。校舎の1階の小さな物音が3階にいても聞こえるほどの静かな時間、ページをめくる音しか聞こえません」

ましたら、結局その生徒は卒業までに400冊以上も読破したのです」本の魅力に気づき没頭していく生徒たちの姿が目につかびます。これだけ生徒が夢中になれる朝の読書、特別な方法や秘密があるのでしょうか。

「①みんなでやる②毎朝やる③好きな本を読む④ただ読むだけ（感想文など求めない）」驚くほど自由でシンプルなそのルールに、逆に本が持つ魅力、奥の深さを教えられたような気がしました。



動は、その後先生方の働きかけや教育委員会の協力を得て、小中学校から幼稚園までその活動を広げていきました。

平成13年には里美村朝の読書研究協議会が発足、村をあげて子供たちの心の教育の取り組みに、平成17年全国の読書活動優秀実践校27校の1つとして選ばれ表彰されました。幼稚園時代から本を読む習慣が身についているせいか、現在の高校生は時間になればさっと本を開き、当たり前のように読書し始めます。

「活動当初のように指導で苦勞することもなくなりました」と先生は笑って話されます。一方市町村合併により新たな課題も生まれました。「新しい常陸太田市となって、これまでの活動をさらに進めて市全体の取り組みになっていければ」と先生は新たな意欲ものぞかせてくれました。

（菊池幾子）

■ルールはシンプル

「どうしても読めない生徒もいました。あきらめずに個人面談を重ね

■現在、そして未来へ

里美高校から始まった朝の読書活

一人ぼっすの 二宮金次郎

読書する姿といつて「二宮金次郎」を思い浮かべるのは、昭和の時代を過ごした世代でしょうか。小学校でよくみかけた二宮尊徳像が今はめずらしくなくなりました。常陸太田市立小学校十九校のうち、今も校庭に像があるのは佐竹小学校のみ。



佐竹小学校の二宮像

銅像は、第二次世界大戦中供出により失われ石像しか残りませんでした。戦後、

台だけ残っていたところに改めてセメントで像が作り直されたところもありましたが、山仕事の帰り歩きながら本を読むという二宮尊徳像は、勤勉の教えとされていましたが、この姿が交通安全上問題があるとされるなどの理由からか、一九七〇年代以降校舎立替時に撤去されることとなりました。

少子化の今、廃校となった入四間小学校跡に今も二宮尊徳像が立っています。

草の生い茂ったかつての校庭を見下ろす場所に一人たたずむ二宮像。日本の歴史がその像から垣間見られます。

（塩原慶子）



入四間小跡の二宮像

リレー
エッセイ

「思い出の本」 ～番外編～



少し時間があるなあ…。そんな時、決まって立ち寄るのは「本屋さん」。そして、中でも特に好きなのが「絵本」のコーナーです。そんな私の原点!とも言えるのが「りゅうの めの なみだ」という一冊の絵本です。

それは、今から40年も前のクリスマスの晩に、サンタクロースからもらったプレゼントでした。朝、目覚めて枕元にこの絵本をみつけ、はじめて手にした時の嬉しさを、今でもよく覚えています。

山の奥に住み、村の人々から嫌われ恐れられていた「りゅう」と、ひとりの不思議な男の子とのとても優しい物語と、いわさきちひろさんの、やわらかくて暖かい絵の中に吸い込まれるように、夢中になって何度も何度も読みました。それ以来、短い物語の中に「伝えたいもの」「大切なもの」「優しさ」を詰めこんだ絵本の世界は、私の大好きなもののひとつになりました。

自分のため、子どものため、そして今では孫のために絵本選びをしながら、40年前にどんな思いで私へのプレゼントを選んでくれたのだろう…と、絵本の棚の前に立つ父の背中を思い浮かべたりしています。

関根 悦美



思い出の本と聞いて真っ先に頭に浮かんだ本は、私が7歳の頃から読んでいた某出版社の「少年少女世界の名作文学」です。

その本は、近所の書店から毎月

1冊届けて貰っていました。茶色の大きな箱を載せた自転車が届けてくれる本。それは、私にとって友達との鬼ごっこや魚釣りよりも大きな楽しみでした。家の中で遊ぶことより外で遊ぶ方が大好きなごく普通の子供だった私も、本が届いたその日だけは食事をとる時間でさえ惜しんで夢中で読んでいたことを思い出します。聞いたことも想像したことも無い物語が、自分の頭の中で繰り広げられる。やがて、その物語と自分しか存在しない世界の住人になっていくことに夢中になりました。物語の世界の住人になっているときには、「鉄腕アトム」や「ビッグX」などどうでもよいことでした。色々な物語の中でも、なんども読み返したのがジュール・ベルヌ作「十五少年漂流記」でした。少年達を乗せた船が難破し、漂着した無人島で15人の少年達が生き抜いて家に帰るまでの物語です。幼かった少年達が自然・外敵・仲間割れをなんとか自分達で克服することによって大人になっていく様子は、幼かった自分にも理解できました。特に、ブリアンには強い憧れを持ちました。つらいこと大変なことにも負けないブリアンは、私にとってのヒーローでした。アトムやウルトラマンもヒーローでしたが、ブリアンは成れるかもしれない僕のヒーローでした。

この原稿を書くにあたって実家から本を送って貰い、数十年ぶりに手に取り読み返してみました。読み終えて本を横から見ると「十五少年漂流記」の部分だけが汚れていて、ある頁には指の後が残っていました。小学生の自分とブリアンとの再会に、うれしい気持ちと懐かしい気持ちで満たされながら本を綴じたとき「久しぶりだね弘君。年齢を重ねるだけでは大人には成れないんだよ。」と聞き覚えがある声でブリアンが語りかけてくれたような気がしました。

五十嵐



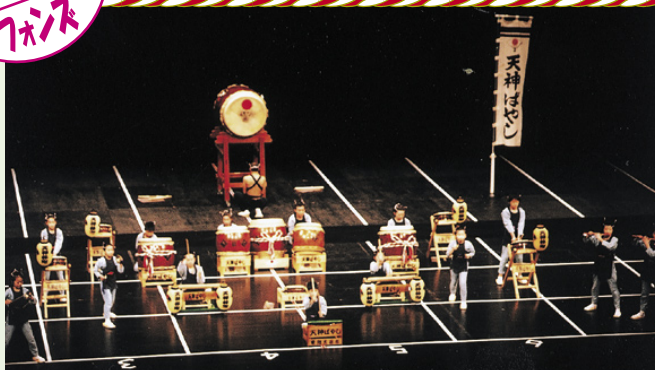
宮崎駿監督のアニメ映画「風の谷のナウシカ」を大好きなアニメにあげる方は多いと思います。原作はある漫画月刊誌に約15年間の長い間連載され、単行本で全7巻発行されました。

「ナウシカ」とのはじめての出会いは高校生のとき。1、2、3巻と読んで「なんか違う」と思いました。その当時、映画はすでに上映されておりTV放映はもちろんビデオも販売されておりました。ところが、月刊誌ではまだまだ連載途中で、それほど長い話を、映画では約2時間という短い時間に収めてしまったため、上手くまとめた感じで「違う」と感じるのは当たり前でした。

月刊誌がまとめられて単行本になるのは1年半から2年分の連載が終わってから。まとめて読みたいので月刊誌は購入せず、単行本化を2年弱まちわびて、忘れた頃に本屋で見かけ購入し、また最初から読み返すことを繰り返し、内容がやっと理解できる頃には漫画好きな高校生は社会人となっていました。

すべての技術の進歩がもたらした弊害、「自分達が壊し住めなくした環境、残された土地のめぐる争い、遺伝子組み換え、クローン技術、不自然な生の流れ…」、今でこそニュースでもよく耳にすることですが、その当時宮崎監督はすでにそういう怖れを真剣に訴えていたのだと気づかされます。「マンガ」は読書とは呼ばないでしょうか？自分は自信をもってこの「マンガ」を皆さんにお勧めします。たかが「マンガ本」ではありません、活字の苦手な私でも十分に感じる事が出来る深い内容を伴った「本」と呼べるものです。映画を見た方も、機会があれば是非読んでみてください。

(U.S)



第8回 総務大臣杯・文部科学大臣賞
日本太鼓ジュニアコンクール 平成18年3月19日

第1部 総務大臣杯日本太鼓ジュニアコンクール茨城県代表選考会
茨城県内の高校生以下で構成する太鼓団体他

第2部 茨城太鼓の饗演 第2回優勝 子供天神ばやし
第1回優勝 日立風流太鼓大蓮

第3回 茨城太鼓祭り



伝統の日本太鼓を次世代につなげる「茨城太鼓祭り～日本太鼓ジュニアコンクール」は今年3回目を迎えます。昨年は常陸太田市の「天神ばやし保存会」が優勝、今年の大大会では招待演奏を披露します。県内各地の日本太鼓の演奏にあわせて、優勝の栄冠に輝く「天神ばやし保存会」の子供たちの息のあった演奏をどうぞご覧ください。

期 日／2006年**11月12日(日)**

開 演／13:00 終演予定／17:00

会 場／パルティホール
入場無料

LOVE♥おおたフェスタ2006

テーマ「わ」～笑顔ときずなを深めよう～



今年で14回目になるLOVE♥おおたフェスタが太田地区の祭りから太田全域への祭りにグレードアップ！イベント内容も熱気もパワーアップし間違いなく遊びに来てくれるみなさんに楽しんでいただけたらと思います。

場所 パルティホール **期日** 10月29日(日) **9:00～17:00** **雨天決行**

♥♥ イベント内容 ♥♥

久自楽舞演舞・和太鼓演奏・アマチュアバンドライブ
フリーマーケット・キャンドルナイトハンドベルコンサート
太田まつりフォトコンテスト作品展示・模擬店・その他いろいろ

主催：IMPULSE 常陸太田市商工会青年部



鯨ヶ丘まちかど美術展開催決定!!

常陸太田市美術協会と鯨ヶ丘商店会が共催で「鯨ヶ丘まちかど美術展」を開催します。

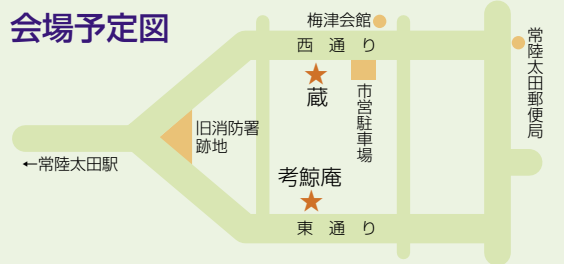
蔵と考鯨庵をメイン展示場として、商店会のお店にも作品を展示します。作品はもちろんですが、取り壊される寸前の蔵をリフォームした「蔵」は一見の価値があります。開催期間中は、鯨ヶ丘商店会でイベント（スタンプラリー、カフェ等）を企画していますので、絵画の鑑賞と蔵のあるまちかどの散策にしてください。変更がある場合もありますが、詳細は新聞チラシ等でお知らせします。（いがらし）

期 間：11月18日(土)～11月26日(日)

時 間：午前9:30～午後6:00
(最終日は午後3:00まで)

会 場：西二町の蔵・考鯨庵・鯨ヶ丘商店会の店舗
主 催：鯨ヶ丘商店会・常陸太田市美術協会
後 援：常陸太田市・常陸太田市教育委員会・
常陸太田市商工会

会場予定図



新シリーズ

百姓田さんの
たべもの日誌

私がここ里美の山里に住んで、6年になろうとしている。結婚と同時に、やはり都会から農業に憧れて移住した夫と共に、野菜を作り、米・大豆・麦を作り、子供を作り育てながら、百姓をしている。この山里に初めて訪れた時は、「まだ日本にもこんなところがあったのか!」という印象だった。今ではそれがごく普通の当たり前のことと思っているので、何がそんなに衝撃的だったのか思いだせないが、スーパーがないとか、見渡すかぎり田んぼと山の中で、元気に百姓してるじいちゃん・ばあちゃんの姿とか、そういうことがとても新鮮だった。そして、住めば住むほどに、様々な農村の顔と出会い、いろんな経験を通して、山里暮らしの奥深さを知り、やめられなくなった。



一番恵まれていると思えるのは、やはり食だ。村の人の自分らで作った米・野菜・豆やらをおいしく食べるための知恵や技にはすごいものがある。私はそういう食を味わう機会があるにつけ、自分も挑戦してみる

のだが、なかなか同じようにはいかない。これも経験を要するおふくろの味の妙かな。

さて、こちらに来てまず覚えたことは、お祝いごとには必ず「おふかし(おこわ)」を炊くこと。このへんでは黒いさきぎ豆をいれたお赤飯か、鶏肉・ごぼう・人参・きのこなどをいれた五目おこわが主流だ。作る時は大抵たくさん蒸かすので、ガスコンロよりも外のかまどで、羽釜に大きなセイロを置いて蒸かす。薪で蒸かすのは大変だがやはり味が一味違うという。また、蒸かしながら打ち水を数回して、しとらすあんばいで硬さを調節する。あまりやわらか過ぎても美味しくないし、ごわついたのもいけない。先日、風祭りという、この時期の天候回復を祈る嵐除けの神事が、集落内で行われた。そこでお札をもらい、竹にはさんで、自田の隅ににさしておく風習である。その時も世話人の女性が作ってくれたおふかしは、絶妙のやわらかさと味だった。この加減、私もばあちゃんになる頃までには、習得できるだろうか!?

(木の里農園
ふせ 美木 布施 美木)



風まつりのお札のある田んぼ

子育て奮闘記

踊るママパラダイス ③1

以前にも書いたことがあります。我が家の子ども達はピアノを習っています。特に、将来就く職業に役立てて欲しいという思惑もなく、弾けるということが、とても楽しそうでレッスンに通わせています。

練習をしないと、小言をいうことは、多々ありますが、私は、一つだけ、これだけはしないと心に決めていることがあります。発表会で失敗しても、責めないということです。発表会の練習というのは、長ければ半年近く前から徐々に始めます。半年間、一曲だけ練習すればいいのだから、それは、完成度も高く、出来て当たり前と思いがちですが、幼い子が半年間、毎日毎日、同じ曲を練習するというのは、大変な根気が必要だと思えます。また、年上になれば技術の必要な高度な曲を弾くようになります。巧くなればなるほど、不思議なことに、本人の中でもっと巧く弾けるはずなのに、という思いが強くなるようです。毎日練習しながら「おかしい、こんなんじゃないの。」と自分の演奏に疑問を感じることもあるようです。それは、もう、成長としが言えません。そんな姿を親も毎日見るわけです。そうして気づくのです。発表会で演奏している我が子を見ながら「すごく頑張ったな、えらかったな。」と。

先日の発表会でスマシが弾いた曲は、これまでになく高度な曲でした。頑張っていたのを知っている私は、演奏の後で「よく頑張ったね。」と彼氏の努力を認めました。しかし、彼は納得がいかず、半年間の練習がとてもしつかったと涙を流しました。「やめたくなかったの?」楽しくない習い事ならいつでもやめていいと考えた私が聞くと、スマシは首を振ってこう言いました。「もっと、巧くなる。」

——その言葉を聞いて私も涙が出ました。花丸をあげる——

きれいな服を着せてもらって、華やかにステージに立つ小さな演奏家達は、舞台裏では、必死にもがいて、涙して、幕が開くと顔を上げて中央に歩き出します。すごいね、すごいね、大人も頑張らなきゃね!

——わいわいネット 織田 裕子——

だって女の子だもんね、お姉ちゃん



私の子供が小さい頃、時間が有れば子供と一緒に添寝して、絵本を読んでいた。そのなかで、一番印象に残っているのが、「はじめてのおつかい」。

主人公のみいちゃんが体験する初めてのおつかいを、ドキドキする心情が見事に描かれ、素朴なタッチの絵がすがすがしく、感動を呼ぶ内容で、娘たちもドキドキしながら聞いていたのを思い出します。絵を良く見ると、色々な発見があります、緊張した主人公を表現するため、右手と右足が一緒に出ていたり、近所の犬も心配そうに見ていたり、見るたびに新しい発見があり、読み手の心が揺さぶられました。

今回改めて絵本を読んでもみると、私の育った昭和40年代の懐かしい住宅街の様子がリアルに描かれており、絵も良く見ると作者の名前がお店の名称だったり、探し猫の張り紙の猫が小さく描かれていたり、遊び心もふんだんに散りばめられた素晴らしい絵本だと再確認しました。今、商店が激減し、大型スーパーやコンビニに変わっている町並み、買い物に行っても「これください」といわずに、会話などしなくても用事を済ませられ、心の通い合うものが少なくなっている社会が心配になります。読書離れを危惧する識者が多い昨今、読書の習慣をつけるためには、子供の頃の絵本の読み聞かせが最良といわれ、絵本を読んでもらっている子供は、自然に本に興味を持ち一人読みをするようになると言われてしています。さらに、絵本の読み聞かせを通して、子供を愛している親の気持ち「健やかに、心豊かに、幸せに育ってほしい」という願いが子供と一緒に伝わるのではないのでしょうか？

素敵な絵本は、大人の疲れた心を癒す効果もあり、子供に良いだけでなく、子供心を忘れてしまった大人にもいいのかもしれません。

(次回は 小島町 永井 理和子さん)



学び舎から

子どもの読書活動に 地域のボランティアの協力を得て

常陸太田市立久米小学校

久米小学校では、全校読書の時間を設け、創造力や豊かな心をもった児童の育成を目指しています。

毎月2回、地域のボランティア「おむすびの会」の方々が、朝の読書の時間を利用して、各クラスで絵本の読み聞かせをしてくれています。この時は特に子ども達の目が、輝く時間になっています。言葉や活字から豊かに創造し、そこから判断力や感性が育っていくものと思います。7月13日には、「おむすびの会」の自作の布絵を用いた読み聞かせ会が体育館で行われました。「スーホの白い馬」の作品を聞いた1年から3年生の児童が感動に浸った時間でした。2学期には、高学年児童を対象に読み聞かせ会が予定されています。

また、図書ボランティアの活動も活発です。毎月第1・第3金曜日の午前中大勢のお母さんが本の整理など図書室の環境を整えてくれています。9月には、市立図書館の館長さんを講師に、図書室の本の管理の仕方の講習会が実施されます。

これからも地域の方々の協力を得て、思いやりのある豊かな感性を持った子ども達を育てていきたいと思えます。



ちよつとひといき

「ふるさと」を贈る

贈り物の季節はいつも迷う。遠方の知人に、ふるさとを離れて暮らす友に、「常陸太田そのもの」を贈ることってできないのかなあ、と。酒・醤油・漬物・そば等、メーカーが違う太田の味をぎゅっとまとめたギフトセットは、初めて見つけたとき「やるじゃん！」ってうれしかった。もらった人が包みを開けたら「たまには帰って顔を見せてね」とか、「常陸太田にはおいしいものがたくさんあるのよ」って、伝えてくれそうな気がする。(塩原慶子)



3,000円 Aセット(税込み)

常陸ワイン・ぶどうジュース
天然水つゆ・常陸秋そば3本

お申し込み
『西山の里 桃源』
常陸太田市新宿町576
TEL 0294-73-1300

※その他、お客様のご要望に合わせて詰め合わせいたします。
地方発送も承っております。(送料 全国一律700円)

フォonzのバックナンバーはホームページでご覧になれます。

常陸太田市 (<http://www.city.hitachiota.ibaraki.jp/>) → 「生涯学習センター」 → 「情報誌」です。